

2004-05 年度の年間カリキュラム報告

ーアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの中上級日本語集中教育ー

松本 隆

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC: Inter-University Center for Japanese Language Studies）は、北米の大学生・大学院生などに対して、中上級レベルの日本語を集中的に指導する教育機関である。日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育し、日本研究の専門家および日本関係の実務家の育成に寄与している。

当センターの教育事業は、年間 40 週間におよぶレギュラーコースと、夏期 6 週間にわたるサマーコースの 2 つからなる。2004-05 年度のレギュラーコースでは 47 名を受け入れ、それに続く 2005 年 6～8 月のサマーコースでは 26 名の学生に対して授業を実施した。本稿は前者レギュラーコースにおける指導内容について、反省や要改善点にも随時ふれながら、紹介していく。なお反省点は、各教科の内容と授業の運営方法に関する、学生への質問紙調査から得た情報に基づくものである。

2 レギュラーコースの概観（40-Week Intensive Program）

2004 年 9 月 6 日から翌 2005 年 6 月 10 日までの 40 週間にわたってレギュラーコースを実施した。本コースは 4 つの学期に分かれ、9 月から 10 月末の秋休みまでを第一学期、11 月から 12 月の冬休みまでを第二学期、翌新年 1 月から 3 月の春休みまでを第三学期、そして春休み明け以降コース終了までを第四学期と称する。一・二学期をまとめて前期と呼び、三・四学期を後期と呼んでいる（表 1～4 参照）。

表1 前期午前の内容

週	2004年 午前	月	火	水	木	金
1	9/ 6- 9/10	入学オリエンテーション 写真撮影	筆記試験	所長個人面談	所長個人面談	SKIP と CALL のオリエン テーション
2	9/13- 9/17	文法 基礎 お試しクラス				
3	9/20- 9/24	敬老の日			秋分の日	
4	9/27-10/ 1		文法 復習 ASJ/JG			
5	10/ 4-10/ 8					横浜の日 秋の校外学習
6	10/11-10/15	体育の日				
7	10/18-10/22		待遇 表現			
8	10/25-10/29					
9	11/ 1-11/ 5	秋休み10/30(土)～11/7(日)				
10	11/ 8-11/12		接続 表現			
11	11/15-11/19					
12	11/22-11/26		勤労感謝の日			
13	11/29-12/ 3					
14	12/ 6-12/10	上級日本語 第1部 書き言葉編				
15	12/13-12/17					
16	12/20-12/24			個人面談 前期評価	天皇誕生日	
17	12/27-12/31	冬休み12/23(木)～1/16(日)				
18	1/ 3- 1/ 7					
19	1/10- 1/14					

凡例 《 》 放課後の自由選択授業、1～4学期「書道」、3～4学期「ビジネス」
 [] 教員会議、第39週午前「評価会議」
 ※ 次学期の説明会など、13週午後「3学期の説明」、23週午前「4学期の説明」、33週午前「卒業発表の説明」

表2 前期午後の内容

週	2004年午後	月	火	水	木	金
1	9/ 6- 9/10	発話試験 所長個人面談	所長個人面談	所長個人面談	所長個人面談	個人面談1 入学祝賀会
2	9/13- 9/17	漢字と発音のオ リエンテーション	午前の文法復習 クラスの説明会		漢字発音オリテ 所長個人面談	個人面談2 診断的評価
3	9/20- 9/24	敬老の日			秋分の日	
4	9/27-10/ 1		所長個人面談	所長個人面談		
5	10/ 4-10/ 8		《書道オリテ》		総合 運用 I	横浜の日 秋の校外学習
6	10/11-10/15	総合 運用 I				講演会 久野明子
7	10/18-10/22	体育の日	《書道開始》			
8	10/25-10/29					個人面談 1学期評価
9	11/ 1-11/ 5	秋休み10/30(土)～11/7(日)				
10	11/ 8-11/12					
11	11/15-11/19					
12	11/22-11/26	総合 運用 II	勤労感謝の日		総合 運用 II	
13	11/29-12/ 3		講演会 梅沢ふみ 子※3学期の説明			
14	12/ 6-12/10					
15	12/13-12/17					
16	12/20-12/24			年末パーティー	天皇誕生日	
17	12/27-12/31	冬休み12/23(木)～1/16(日)				
18	1/ 3- 1/ 7					
19	1/10- 1/14					

表3 後期午前の内容

週	2005年 午前	月	火	水	木	金	
20	1/17- 1/21						
21	1/24- 1/28						
22	1/31- 2/ 4	選 択 A	上 級 日 本 語 第 2 部		選 択 A	選 択 B	
23	2/ 7- 2/11	政治経済 人類学		話 し 言 葉 編	※4学期の説明	建国記念の日	
24	2/14- 2/18	文学 歴史 法律				スピーキング リーディング リスニング	
25	2/21- 2/25						
26	2/ 2- 3/ 4						
27	3/ 7- 3/11			個人面談 中間評価			
28	3/14- 3/18	春休み3/12(土)～3/27(日)					
29	3/21- 3/25						
30	3/28- 4/ 1					東京の日 春の校外学習	
31	4/ 4- 4/ 8		待 遇 表 現 Ⅱ				
32	4/11- 4/15	選 択 A	接 続 表 現 Ⅱ		選 択 A	選 択 B ライティング リスニング	
33	4/18- 4/22		上 級 日 本 語 Ⅱ			日本文化論 現代小説	
34	4/25- 4/29		講演会 G.カーティス			※卒業発表の説明 大型連休	
35	5/ 2- 5/ 6	ゴールデンウィーク 4/29(金)～5/5(木)					
36	5/ 9- 5/13		上 級 日 本 語 Ⅱ				
37	5/16- 5/20	選 択 A			選 択 A	選 択 B	
38	5/23- 5/27						
39	5/30- 6/ 3	発話試験 am 筆記試験 pm	[評価会議]	[評価会議]	[評価会議]	[評価会議]	
40	6/ 6- 6/10	卒業発表予行演習	卒業発表会	卒業発表会		個人面談 総括的評価	

表4 後期午後の内容

週	2005年 午後	月	火	水	木	金	
20	1/17- 1/21				《ビジネス開始》		
21	1/24- 1/28						
22	1/31- 2/ 4		総合運用Ⅲ 現代史 大衆文化 ビジネス社会		総合運用Ⅲ		
23	2/ 7- 2/11			建国記念の日			
24	2/14- 2/18						
25	2/21- 2/25						
26	2/ 2- 3/ 4						
27	3/ 7- 3/11	プロジェクトワーク			プロジェクトワーク		
28	3/14- 3/18	春休み 3/12(土)～3/27(日)					
29	3/21- 3/25						
30	3/28- 4/ 1		プロジェクトワーク		プロジェクト	東京の日 秋の校外学習	
31	4/ 4- 4/ 8						
32	4/11- 4/15						
33	4/18- 4/22						
34	4/25- 4/29					大型連休	
35	5/ 2- 5/ 6	ゴールデンウィーク 4/29(金)～5/5(木)					
36	5/ 9- 5/13		プロジェクト		プロジェクト		
37	5/16- 5/20						
38	5/23- 5/27						
39	5/30- 6/ 3	発話試験 am 筆記試験 pm		発表練習予備日 《書道終了》			発表練習予備日
40	6/ 6- 6/10	卒業発表予行演習 発表会場下見	卒業発表会	卒業発表会		卒業式 卒業祝賀会	

午前と午後の授業の特徴を端的に色分けするとすれば、午前は日本語の構造や知識に関する言語形式面を重視し、午後は聴読解や発話など言語運用の技能を伸ばす、という力点の置き方に差異がある。午前は「文法復習」「待遇表現」「接続表現」「上級日本語」を必修科目とし、後期には「選択A」「選択B」という選択必修科目を「上級日本語」と並行して実施した。午後は「総合運用」が一学期から三学期まで続き、四学期の午後は「プロジェクトワーク」を行った。

授業は月曜から金曜まで毎日、午前は9時00分から10時00分までコンピュータを使用した学習、10時00分から50分授業を2コマ行い、午後は1時30分から3時までの90分授業のあと、3時10分から5時00分まではコンピュータを使用した学習を実施した。なお水曜日の授業は午前2コマのみで、午後はコンピュータ学習にあてた。

3 午前の必修科目 (Morning Session)

午前の授業は、まず文法事項の基礎固めをしたのち（文法復習）、対人関係に配慮したコミュニケーションの方法を学び（待遇表現）、さらに連文・連段落の組み立て方を学習し（接続表現）、そのうえで文脈に即した微妙な表現の使い分けができるように（上級日本語）、段階的に構成されている。

3-1 文法復習 (Japanese Grammar Review)

中級学習者にとって難しい文法事項、誤りやすい文法事項を取り上げ、その運用練習をすると共に、より正確さを高める学習を行う。教科書として、当センター編集発行の市販教材 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*（創研社刊、略称A S J）および当センター編集作成の内部教材 *Japanese Grammar* を用いた。また、音声による文法事項のドリル練習ができる文法復習ドリルソフトウェア「文法復習ドリル Ver.2.6」およびテキストの会話部分の練習ができるソフトウェア「A S J 会話 Ver.1.1」を使

用した（ともに当センターによる開発）。

2004-05 年度は、第 2 週から第 6 週まで、試験（1 日）および学習スタイルなどを見極めるための「文法基礎」通称「お試しクラス」2 日間も含めて合計 21 日間行った。

A S J に関しては本冊と別に、補助教材として各種プリント類（クイズや練習シートなど）を準備しているが、学生の多様な弱点補強に即応できるよう、今後さらに拡充させていく計画である。

3-2 待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)

日本人との人間関係を円滑に保ちながらコミュニケーションを維持できる技能の育成が目標である。敬語および敬語使用に伴う随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動が適切にできるようにする。教科書として当センター編集発行の市販教材『待遇表現』（ジャパントイムズ社刊）を用い、また当センター開発のソフトウェア「待遇表現 Ver.2.1」も併用した。2004-05 年度は、第 7～8 週および第 30～31 週の合計 14 日間にわたって行った。

書籍としての『待遇表現』は 1991 年の市販化からすでに 15 年の時を経ようとしており、会話の内容や練習の場面設定などが現在の状況にそぐわない点も目についてきた。例えば、書店に電話をかけて本の在庫を確認する作業は、いまやインターネットのほうが手軽にできる。実際の教室作業では、現実に即した練習を組み入れて対処するなど、時代の変化に取り残されないような、たゆまぬ努力が求められる。

3-3 接続表現 (Conjunctive Expressions in Japanese)

接続詞を中心に、文の接続方法を学習し、段落や文章を組み立てる基礎力の習得をねらいとしている。2004-05 年度は、第 10～11 週および第 32 週の合計 10 日間にわたり実施した。

昨 2003-04 年度と本 2004-05 年度とでは「待遇表現」と「接続表現」の実施順序を入れ替えた。つまり本年度の場合、1 学期に「文法復習」と

「待遇表現」を続けて実施し、2学期に入ってから「接続表現」が始まり「上級日本語 書き言葉編」へと進んだ。この順番にすることで、口頭表現を重視した1学期と、読み書きに比重をおいた2学期との色分けが明瞭になった。

3-4 上級日本語 (AJ: Advanced Japanese)

「上級日本語 A J」は専門別日本語学習が始められる段階まで日本語力を総合的に高めることを目的とし、書き言葉編 (第1部)、話し言葉編 (第2部)、補足編 (A J II) からなる。2004-05年度は、第1部を23日間 (第11週から第16週まで毎日)、第2部を15日間 (第20週から第27週まで週2日)、A J IIを9日間 (第33週から第38週まで週2日) の合計47日間にわたって行った。

A Jは、第1部と第2部の各課が同一の話題 (例: 豊かさの指標) をめぐって、読解練習および書き言葉の文型・語彙・表現の学習 (第1部) と、高度な会話の技能習得 (第2部) を並行的に進められる教材の構成になっている。昨 03-04年度まではこの編集方針にしたがって、同一話題をめぐる書き言葉と話し言葉を交互に指導していたが、本 04-05年度は上記の通り第1部と第2部を切り離した。2学期には書き言葉を、3学期には話し言葉を、短期間に圧縮して取り扱うことで、学習指導の焦点が明確になり、特に2学期には文型積み上げの達成感を得た学生が多かった。

4学期には「待遇表現」と「接続表現」の復習・補強に続き、多様な文章形式 (論説、随筆、小説など) を盛り込んだ「A J II」を教材とした。反省としては、教材の多彩さゆえ、学習目標が拡散するという印象を学生に与えてしまった点が挙げられる。

4 午後の必修科目 (Afternoon Session 総合運用 I ~ III)

午後の授業は、身近で日常的な話題から始まり (総合運用 I)、より広範な社会的話題へと発展し (総合運用 II)、学習者の興味や関心に応じた

話題の学習（総合運用Ⅲ）へと進む。教材として用いたのは、生素材を加工して教材化したものが多い。

4-1 総合運用Ⅰ（Applied Japanese SkillsⅠ）

この総合運用Ⅰは「経験談」「新聞入門」「ニュース入門」「新聞ニュース」の順に、身近で自然な話し方に慣れるとともに、時事的な語彙や表現を身につけることを目標とする。また、そうした話題の中で既習の文法事項・語彙・表現などを応用し、定着促進を図ることも目標のひとつである。2004-05年度は1学期の授業期間つまり第3週から第8週までの合計18日間行った。

第1学期の総合運用Ⅰでは、日本語の習熟度の低い学生、特に過去の滞日経験が浅く発話に不慣れな学生のために「着実コース」という課程を提供した。このコースでは上記「標準コース」のユニット順を一部入れ替え、まず日常会話の聴解力を伸ばしたのち、社会的・時事的話題をめぐる聴解・読解力を鍛錬し、その間に受容的な能力を十分に蓄えておき、第1学期の最後に「経験談」を扱った。「経験談」では聴読解練習と併せて、学生が教員にインタビューをして後日その報告をクラスで行う。こうした産出面を重視した練習を学期の最後に移したことにより、日本語の発話に不慣れな学生の精神的不安を軽減することができた。

標準・着実両コースの「新聞ニュース」では、事件・環境・労働・教育・生活・国際といった新聞ニュースから採った素材をほぼ日替わり状態で扱った。広く浅く多様な話題に触れさせることをねらいとしたが、こうした方法では、素材の消化不良を引き起こしかねない。クラスの実情に応じて、扱う素材の分量を加減し、語彙・表現の定着を促す十分な反復練習の機会を確保する必要性を痛感した。

4-2 総合運用Ⅱ（Applied Japanese SkillsⅡ）

一般的な社会問題などに関する読物とビデオ（報道番組など）を素材に読解・聴解練習をし、これらの話題について討論を行うことにより、広範

な話題について日本人と話し合う能力を獲得させる。この総合運用Ⅱでは話題シラバスのモジュール型教材を採用し、トピックとして「ものづくり」「文化の発信」「外国人と国籍」「地球環境」「働く女性」「教育制度」「差別と人権」を用意した。2004-05年度は2学期の授業期間つまり第10週から第16週までの24日間行った。

「ものづくり」と「文化の発信」が本年度あらたに作成した教材であり、この2トピックを全クラスで扱う共通トピックとし、それ以外の5ユニットは各クラスの興味関心に応じて選ぶトピックとした。選択の余地ができたことにより学生の要望に対応する一歩を踏み出したことになる。長期的には選択の幅をさらに広げてモジュール型教材群の充実を目指していきたい。

新作教材のほか本年度の新たな試みとして、自律協働型の語彙学習法を導入した。従来型の語彙指導は、教師の側から覚えるべき単語を提示し後日クイズを行うというものであった。新たな方法では、学生みずから自分達にとって必要だと思う単語をクラスで選び出し、後日それを白紙のクイズ用紙に記述するという方法を試用した。このような自律協働志向の学習方法は、学習スタイルやクラスの雰囲気・集団力学によって成否が分かれる場合が多く、学生によって向き不向きがあるのではないかという印象を得た。次年度は、学生の求めに応じて、従来型の重要語リストも提示できるように準備しておき、実情によって対応を切り替える予定である。

4-3 総合運用Ⅲ (Applied Japanese SkillsⅢ)

学生は各自の専門や興味に応じて「現代史」「大衆文化」「ビジネス・社会」の3コースの中から1つを選択した。各コースでは、読物素材を扱い、ビデオ(テレビの報道番組など)を視聴して、これらの話題について討論を行えるように指導した。2004-05年度は3学期の授業期間つまり第20週から第26週までの合計27日間行った。

4-3-1 現代史 (Modern History)

ムービーフィルムが残されている 1900 年前後からの日本の歴史を、特に戦後を中心にビデオと読み物で概観した。「戦前の日本 1900-45」「敗戦と復興 1945-55」「高度成長 1955-70」「現代の日本 1970-95」などの話題を取り上げた。

4-3-2 大衆文化 (Popular Culture)

広い意味での日本の“大衆文化”に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「映画」「漫画」「文化政策」「伝統文化・古典芸能」などの話題を取り上げた。

4-3-3 ビジネス・社会 (Business/Modern Society)

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「バブルの前と後」「創業者」「通産省と大蔵省」「平成不況」「雇用制度」「系列」などの話題を取り上げた。

5 後期の選択必修科目 (Second Half of Program, Elective Courses)

様々な分野別のコースを開設し、学生は各自の専門や、必要とする技能に応じてコースを選択した。選択 A (週 2 回の必修選択)、選択 B (週 1 回の必修選択)、選択 C (週 1 回の自由選択) の 3 種類を開設した。選択 A では、専門に関する書物を読んだりビデオを視聴することによって、それぞれの専門に必要な語彙や表現を身につけ、同時に各専門の内容についても学んだ。選択 B では、必要とする日本語技能の学習や弱点の補強を行った。

5-1 選択 A (Elective Course A)

各学生は「政治経済」「人類学」「文学」「歴史」「法律」の中から自己の専門領域に関連するコースを 1 つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する能

力の育成に取り組んだ。

2004-05 年度は、3 学期つまり第 20 週から第 27 週まで、および 4 学期つまり第 30 週から第 38 週まで開講した。基本的に学生は 3～4 学期の後期課程全体を通じて同一のコースを履修した。

5-1-1 政治経済 (Politics/Economics)

“今の日本”を知りそれについて意見を言えるようにすることを目標とした。3 学期には日本の政治と経済に関する基礎的な情報を提供し語彙を紹介した。この基礎知識をふまえて、4 学期には現在の政治経済問題に関する読み物やビデオを学習した。

5-1-2 人類学 (Anthropology)

人類学・社会学・美術史・芸術などに関連する素材たとえばテキスト・調査報告・論文などを幅広く取り上げた。3 学期の冒頭ではどの学生も共通に知っておくべき中核となるべき話題を扱ったのち、3 学期の半ば以降は各学生の専門や興味に応じて様々な素材を扱いながら考察を深めた。

5-1-3 文学 (Modern Literature)

明治から現在までの短編小説や評論などの文学作品を取り上げ、理解・鑑賞したのち話し合いを行った。概ね 2～3 回で 1 作品を読んだ。3 学期は現代文学を、4 学期は明治から大正初期までの作品を扱った。

5-1-4 歴史 (History)

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積みあげた。古代から近現代までの日本史をトピックとして取り上げた。

5-1-5 法律 (Law)

法律独特の日本語表現に関する基礎知識（法律の専門用語やまぎらわしい表現など）について指導した。日本人の法意識、憲法の問題点、日常生

活と法律（民法）の関連、裁判制度、外国人弁護士、ビジネスと法律（契約法・労働法）など現代の法律をめぐる諸問題を取り上げた。

5-2 選択B (Elective Course B)

選択Bでは日本語力の増強あるいは周辺分野の学習を行った。2004-05年度は、3学期（第20～27週）に「スピーキング」「リーディング」「リスニングⅠ」の3種を、4学期（第30～38週）には「ライティング」「リスニングⅡ」「現代小説」「日本文化論」の4種を開講した。

5-2-1 スピーキング (Speaking)

発話力伸張の訓練を行った。具体的には、(1)初級・中級文法の弱点補強、(2)スピーチやディスカッションを通じた抽象的な内容の表現、(3)ビジネス場面における会話表現、などの練習を履修学生の希望に応じて実施した。

5-2-2 リーディング (Reading)

読解素材として、抽象的な内容を扱った評論文を用いた。この種の文章には、筆者の意見が文面に表れていないことも多く、読み込む力を要求される。内容に関する議論も交えながら、精読および速読の訓練をした。

5-2-3 リスニング (Listening)

テレビ番組たとえばNHKのニュースや解説番組などを素材にして、リスニングの訓練を積み重ねた。予習はあまり要求せず、授業で集中して聞き取る形態を採用した。

5-2-4 ライティング (Writing)

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれをみんなで検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

5-2-5 現代小説 (Contemporary Novel)

現在よく読まれている作家の短編小説を毎週1作品ずつ取り上げた。授業では予習を踏まえ学生間の議論を促した。扱った作品は村上春樹「納屋を焼く」阿刀田高「来訪者」向田邦子「かわうそ」川上弘美「神様」など。

5-2-6 日本文化論 (Culturology)

青木保著『日本文化論の変容』をテキストとして用い、戦後、日本人の日本文化観およびアイデンティティに対する認識が、どのように変化したかを考えた。

5-3 選択C (Elective Course C)

2004-05年度は「文語文法」を後期(3～4学期:第20～27週、第30～38週)の自由選択科目として、水曜日の午後に開設した。文語文法の基礎から指導し、古典の読解へと進んだ。

5-4 プロジェクトワークと卒業発表 (Project Work and Final Presentation)

プロジェクトワークでは、各学生が自己の専門や興味のある分野に関する主題を決め、学生主導で調査・研究を進めた。具体的には、関連文献の読解、聞き取り調査、質問紙調査などの活動を通し、それまでに学んだ知識・技能を実際の場面で応用し、さらなる能力の伸長を図った。

2004-05年度は、第27週および第30週から第38週までを、この活動の正規の授業期間とし、第39週を予備週にあてた。予備の授業日まで活用した学生は10回の指導を受けることになった。

表5 卒業発表の題目

「れいぶんくん」：インターネット日本語例文検索エンジン
 黒井千次に於ける「働く」ということ
 「走れ、走りつづけよ」における狂気：
 『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』大江健三郎より
 民家の現状を再解釈する
 鎌倉時代における災いとそのための儀式
 日本人の長寿：伝統か科学か
 職務発明者の相当対価
 横浜のインターナショナル・スクールにみる国際教育の人気
 明治時代における公娼制度ならびに廢娼運動：近代化のダブルスタンダード
 ODA 政策と世論：ミャンマーをケース・スタディとして
 高尾山信仰の歴史的展開
 平家物語の図像学：侍のアイデンティティと歴史的構築
 憲法改正：どこから、どこへ、今はどこ？
 横浜市「G30」計画：昨日のゴミは明日の資源
 鈴木梅太郎と日本生物化学
 待ちと遊歩：若者と渋谷の空間
 現代のオートゥール：岩井俊二と是枝裕和
 「我が一念の発心を楽しむ」：『発心集』鴨長明
 日本のベンチャー企業の環境
 経済産業省の現在のアジア諸国に対する経済連携政策
 「横浜の市民」としての総持寺
 日米特許法：先願主義と先発明主義
 NPO・NGO の活動の現状と今後の課題：国際協力・交流団体の調査
 マクドナルド、心疾患、医療制度
 歌舞伎における悪：弁天小僧の世界
 山川捨松
 山友クリニック：無料医療ニーズに応える診療所
 人間の不在感を表現する「水と油」
 野毛ストーリー
 「婦人こそ社会の基」：植民地朝鮮における
 人口統制、不妊、女性のアイデンティティ、1937-1945
 広告における外国人像
 意味と言う結核(やまい)：嫌悪、エロチシズム、現実のパラダイム
 9.11以降の日本
 横浜寿ドヤ街
 横浜市の外国人児童向けの日本語教育指導
 日本企業と外資系企業の社風
 「ラストサムライ」の勝元対「たそがれ清兵衛」の清兵衛：本当の武士生活とは
 宮本百合子とその「転向」
 株式会社の分析方法
 植民地朝鮮における日本人警察官
 写真で見る戦後横浜
 年中行事を通じた地域の学び方：横浜市立杉田小学校の実例
 茶道の日米比較
 現代の女性歌人
 「アジア主義」と橘樸
 「日系一世」VS「日本人」：海外移住資料館の展示分析を通して

卒業発表会は、10 か月間にわたる学習を締めくくる催しである。各学生は、来賓と全教職員学生の前で、質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、やや改まった形式で発表をした。発表内容はプロジェクトワークの調査研究にもとづくもので、各学生の発表題目は表5の通りである（学生名簿順）。なお当センターのホームページでは2004-05年度も含め過去の卒業発表会の要旨を公開してしているので興味のある方はぜひ参照されたい（http://www.iucjapan.org/presentations_j.html）。

プロジェクトワークは学生が主体的にテーマを掘り下げていくという性格上、その話題に比較的詳しい教員との一対一の指導形態を採っている。各学生は週に1回、担当教員との濃密な時間を持つ反面、それに伴って4学期の午後にはクラス授業が設定できなくなるという制約も生じる。教員側の人的資源に余力があれば、例えば「会話ラウンジ」のような自由選択科目を設けてほしいという学生の声が毎年聞かれ今後の検討事項のひとつである。

6 通年で実施した学習指導と行事など

6-1 アドバイザー制 (Advisory System)

学生1人に専任教員1名がアドバイザーとしてつき、年間を通して学習上あるいは生活上の助言・指導をした。2004-05年度は専任教員1名あたり5～6名の学生を担当した。アドバイザーは担当する学生に日常的に注意を向け、必要に応じて随時相談を受けるとともに、週1回程度「漢字プログラム」の進捗状況を確認・促進する目的で定期的に漢字の読み方・発音指導などを行った。

こうした日々の学習指導と併せて、各学期末にはアドバイザーが各クラス担当教師の評価および学習上の問題点をまとめて、学生にフィードバックや学習指導を行った。

6-2 漢字プログラム（スキップSKIP: Special Kanji Intensive Program）

常用漢字習得のためのプログラムである。自学用教材として当センター編集発行の市販教材 *Kanji in Context*（ジャパントイムズ社刊）を用いた。漢字を単独で取り上げるのではなく、熟語、例文と共に学習する。学生は、ワークブックおよびコンピュータで独習し、翌朝クイズを受け、教材助手が採点するという形で、それぞれの進捗で進めることができる。卒業時までには 1947 字（常用漢字＋2 字）が習得できる標準日程を組み、各教室には「今週の漢字」を掲示し学習促進の一助とした。

2004-05 年度は当センターで新たに開発した漢字学習ソフトウェア（試用版）の実験的運用を開始した。このソフトウェアは *Kanji in Context* の漢字・語彙・意味・例文・音声その他が入っており、機種に依存せず使用できる利点がある。

6-3 講演会・課外授業・行事など

各分野で活躍する講師を招いて講演会を開催した。また、正規の授業が終了した後の時間帯（放課後）に、外部講師に依頼して課外授業も行った。さらに授業時間外に自由参加による体験学習、見学会、校外学習なども行った。本年度の講演会・行事・課外授業は次の通りである。なお本年度は学生主催による行事も活発であり、それらも併せて記載する。

6-3-1 講演会（Lectures）

2004年

10月15日（金）久野明子（日米協会専務理事）

「最初の日本人女性留学生：大山捨松の生涯」

11月30日（火）梅沢ふみ子（恵泉女学園大学人文学部教授）

「富士山における女人禁制」

2005年

4月 8日(金) カール・パイザー

(情報テクノロジー(株)セールスマネージャー)

「日本における就職活動の実態」(希望者のみ)

4月26日(火) ジェラルド・カーティス(コロンビア大学政治学部教授、

「日本政治研究」 政策研究大学院大学客員教授)

6-3-2 課外授業 (Optional Courses)

「ビジネス」 湧井敏雄(株横浜グランドインターコンチネンタルホテル顧問)

3～4学期木曜放課後

「書道」 小林紘子(書家)

1～4学期火曜放課後

「古筆を読む」 小林紘子(書家)

3～4学期火曜放課後「書道」のあと

6-3-3 行事 (Other Educational Opportunities; field trips, site visits, outings, etc.)

2004年

9月10日(金) 入学祝賀会、横浜国際協力センター5階共用会議室にて

9月12日(日) 横浜かもんやま能鑑賞、横浜能楽堂にて(希望者のみ)

9月23日(木) 学生主催バーベキュー、金沢自然公園にて(希望者のみ)

10月 3日(日) 横浜市民と在住外国人の映画会、都築民家園(希望者)

10月 8日(金) 横浜の日(横浜市内における校外学習)

横浜開港資料館、神奈川県立歴史博物館、

横浜情報文化センター、神奈川県立近代文学館、

横浜山手の洋館と公園、横浜中華街など

10月22日(金) 映画「ルパン三世カリオストロの城」鑑賞会(希望者)

これ以降毎週金曜に学生主催の映画会が3月まで続行

10月23日(土) 落語鑑賞①、横浜野毛にぎわい座にて(希望者のみ)

11月 5日(金) 横浜市立大学祭「浜大祭」参加ツアー(希望者のみ)

11月13日(土) 北鎌倉円覚寺座禅会、国宝舍利殿特別拝観(希望者のみ)
11月20日～21日(土～日) 下田開港 150 周年記念シンポジウム(希望者)
11月29日(月) 株式会社「みなとみらい21」主催 講演会・交流会
12月11日(土) 文楽鑑賞教室、国立劇場にて(希望者のみ)
12月18日(土) 落語鑑賞②、横浜野毛にぎわい座にて(希望者のみ)
12月22日(水) 年末パーティー、横浜国際協力センター5階共用会議室にて
2005年
1月31日(月) 防災説明会、避難訓練
2月 6日(日) 相撲部屋見学、高砂部屋・八角部屋(希望者のみ)
2月11日(金) 学生主催アイススケート大会、ハマボウルにて(希望者)
2月15日(火) 大衆文化クラス講演会「雅楽への招待」石川高(雅楽演奏家)
2月19日(土) 落語鑑賞③、横浜野毛にぎわい座にて(希望者のみ)
2月24日(木) 歴史クラス横浜市立中央図書館訪問・書庫等見学
2月25日(金) 憲法九条を考える会、神奈川県民ホールにて(希望者)
2月28日(月) 人類学クラス横浜市立中央図書館訪問・書庫等見学
3月10日(木) 法律クラス横浜地方裁判所見学
4月 1日(金) 東京の日(東京都内におけるバス移動教室)
国会議事堂、靖国神社(遊就館)、旧汐留駅、
日本科学未来館、お台場海浜公園など
4月 4日(月) 学生主催ピースボート説明会(希望者のみ)
4月 8日(金) お花見、横浜みなとみらい新港パークにて(希望者のみ)
4月11日(月) 法律クラス講演会「知的財産権」山口朔生(弁理士)
4月27日(水) 筋肉ミュージカル鑑賞、マッスルシアターにて(希望者)
4月30日(土) 落語鑑賞④、横浜野毛にぎわい座にて(希望者のみ)
5月14日(土) 柔道見学・交流会、横浜湘南台道場にて(希望者のみ)
5月21日～22日(土～日) 下田市主催「黒船祭」(希望者のみ)
6月 6日(月) 卒業発表予行演習会、土岐哲阪大教授の音声指導(希望者)
6月 7日～8日(火～水) 卒業発表会、みなとみらい21まちづくりプラザ
プレゼンテーションルームにて

6月10日(金) 卒業式、卒業祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室にて
学生主催卒業パーティー、横浜港バナナボートにて

6-3-4 評価 (Evaluation)

9月初旬の入学時と5月下旬の卒業直前に、筆記試験(テープによる聴解試験を含む)と発話能力試験を実施した。測定の結果は、年間授業開始時の診断的評価に生かすとともに、終了時の学習成果の客観的把握に役立てた。

またこの能力試験以外にも、各コースごとに試験、または試験に代わる小規模な発表や日々の小テストなどを行うことにより、学生の到達度・伸び具合を把握した。これらのテスト等の結果や、授業を担当する教員が日頃の観察から得た情報は、教職員会議および学生個人別記録簿などを通じてアドバイザーのもとに集約され、その後の指導に還元した。本年度あらたに学生自身による主観的な自己能力評価(いわゆる **Can-Do-Statement**)を入学時と卒業時に実施した。

また学生に対して、各コース内容の評価、および教員の授業運営に関する評価を、質問紙形式で求めた。学生から得たコース評価と教員評価に関する情報は、課程の編成と教授法についての反省材料および今後の授業改善の資料として活用した。

6-3-5 コンピュータの有効利用 (Computer Software)

従来より研究開発に取り組んできた漢字学習ソフトウェア(試用版)が、2004-05年度前期中に完成し、後期より希望する学生に無料貸与し実験的運用を開始した。このソフトウェアは、当センター編集発行の市販教材 *Kanji in Context* のレファレンスブックおよびワークブック(ともにジャパントイムズ社刊)の内容とその音声を収録した、機種依存のないマルチOSソフトウェアである。2003年に東芝国際交流財団から助成を受け、全教員が総力をあげて開発に携わった。このソフトウェアの使用により、自宅学習が容易になると同時に、新たに加えられた様々な機能により、学習

効率が上がった。

7 おわりに

本年度の報告を締めくくる前に、過去の卒業生の活躍ぶりを、参考までに2例だけ紹介する。

1人は1988年に当センターを卒業したデイビッド・ジョンソン氏である（現在、ハワイ大学準教授）。ジョンソン氏が2002年にオックスフォード大学出版局から出版した *The Japanese Way of Justice: Prosecuting Crime in Japan* は、同年アメリカ犯罪学会国際刑事部門の最優良図書賞を受け、2004年に『アメリカ人のみた日本の検察制度：日米の比較考察』と題して邦訳が刊行された。読売新聞が組んだ「検察官」という連載特集で取材を受けるなど（2005年7月12日）日本でも反響を呼んでいる。

もう1人は1994年の卒業生ケネス・ルオフ氏である（現在、オレゴン州にあるポートランド州立大学助教授）。ルオフ氏は2001年ハーバード大学アジアセンターから *The People's Emperor: Democracy and the Japanese Monarchy, 1945-1995* を著し、2003年共同通信社より『国民の天皇：戦後日本の民主主義と天皇制』という邦題で日本語版が出るや、2004年第4回大佛次郎論壇賞の受賞作に決定した。主催団体である朝日新聞の君和田正夫専務取締役は「外国から斬新な視点や資料・データが示されることは、日本の論壇に強い刺激を与えるだろう」と選考の理由を総括した（朝日新聞2004年12月15日）。

卒業生のこうした吉報に触れるたび、われわれ教職員は誇り高く喜びを禁じ得ないと同時に、当センターが負う使命の重さを再確認することになる。検察制度にしても天皇制にしても、日本の研究者ですら容易に踏み込めない領域に果敢に挑み、独創性に富んだ発想で、地道な研究活動を積み重ねて結実させた成果は、高く評価されて然るべきである。

当センターが1963年に設立されて以来1,400名を超す卒業生がここを巣立ち、上記の2名同様それぞれの分野で活躍を続けている。専門とする領

域こそ異なれ、かれらはみな高度な日本語力を駆使し、世界各地で日本理解の促進に有形・無形の貢献をしている。こうした親日家を育てることは、日本の国益という観点からも、計り知れないほど重要な仕事である。

われわれは 40 年以上にわたり、優秀な人材を育成し続けてきたと自負する。学生だけではなく、教職員についてもまた同じことが言える。教師教育は、教員になるまでの養成段階で完了するのではなく、むしろ学校という実践共同体に参加した後にこそ主体的に取り組むべき課題である。このセンターでは、良きにつけ悪きにつけ、教職員間の協業が重視され、それが潜在的な教師教育の機会となっている。ある新人教員の言葉を借りれば、ここは教師冥利に尽きる職場なのだという。また、あるベテラン教員は、当センターが教師にとってもまた学校（学び舎）であったという旨の言葉を残し、ここを停年退職した。日常の業務をこなすことが経験知を深める糧となり、また、同僚と仕事を進めていくことが経験の多寡を問わず互恵的な成長機会になるとすれば、こうした指摘は的確なものといえよう。ただし、協調や合意形成には時間と労力を要し、調整による損失という代償も覚悟しなければならない。対費用効果の均衡を見極めるのが難しいことである。

人を育て、自らも成長する。そんな環境作りに、なおいっそう尽力していきたいと、われわれ教職員一同は考えている。

(まつもと たかし／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

言語課程主任)